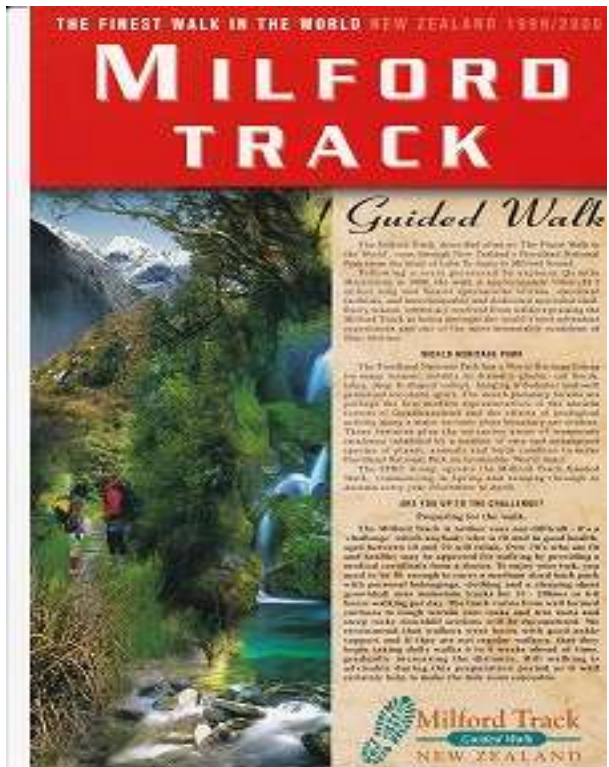


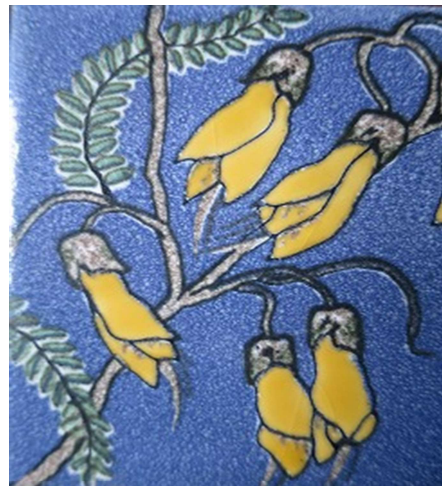
私のミルフォードトランピング

ニュージーランド南島へ

「世界で最も美しい散歩道」その言葉は3年前からずっと私の頭の中にあった。私の所属する山の会「べるくらぶ」のメンバーにも既に数名がこのミルフォードトラックを歩いていたし、NHKが女優田中好子の体験を放映したりしていたので、何時かチャンスがあれば是非にと思っていたのだが、それがついに実現することになった。それはべるくらぶ鈴木修さんのテニス友達田中広太郎さんがアサヒトラベルインターナショナルという海外旅行会社の社長であったという幸運によって。私にとって南半球に飛ぶこと自体はじめての経験だったが、何よりも100年以上前から英国の詩人ブランシュ・ボーガンがロンドン・スペクテーター誌上に“The Finest Walk in the World”と発表して以来世界中のトレッカーの憧れの的となったその場所に自分が行けることに興奮した。



雪の成田空港



COWHAI

2002 年 12 月 9 日 11:30pm 雪で大幅遅れとなったが我等一行 19 名はカンタス航空 QR22 便で成田空港を出発、水平飛行になって真夜中のディナー、何とか睡眠をとりたいのでワインを赤白と飲んだが余り気持ちの昂ぶりを静める効果はなかった。

夜が明けてオーストラリア上空に差し掛かったが緑のない土漠が続く、そろそろ着陸態勢かと思った頃、左翼の先端に閃光が走りドスンと機体が大きく揺れた、飛行機で初めて経験した落雷だったが運行に支障なしのアナウンスで一安心、20 分後 10:55am にシドニー空港に無事着陸した。心配していた通り、乗り継ぎ便が前便の遅れを待たないのはその通りだったが、運よく 0:00pm 出発予定の QF185 便に乗れることになりヤレヤレ、タスマン海を越えてニュージーランド上空になると窓外に美しい緑の絨毯が広がりやがて灰色の筋を束ねて流れるワイマカリリ川を越えクライストチャーチ空港 3:30pm 到着、日本からはほぼ真南になり気候は真夏、時差はサマータイムで 1 時間プラスの 4 時間だが東西方向への大移動ではないのでそれほど苦にならない。成田空港でのクリスマス飾りは当然のこととして南半球夏の最中クライストチャーチ空港でもクリスマス飾りがあって一寸変な感じだったがこちらでは当たり前のことなのだろう。



ワイマカリリ川



クライストチャーチ夏のクリスマス飾り

入国審査は比較的簡単だったが食品の持ち込み禁止、登山靴の裏の土はしっかり調べられた。ニュージーランドは太古から大陸と切り離された孤立の島だったため、クジラと蝙蝠以外は哺乳類がいない独特の生態系を持っていて猛禽類がいないのでキウイやウエカ、タカヘなど鳥は飛ばなくなる進化をしたが、特に白人移民の入植以来持ち込まれた犬、猫、鼠、鹿、イタチなどによって大きく生態系を攪乱された。我等が綺麗な花と愛でるルピナスもまたしかり、自然環境、生態系保全に対する極めてシビヤな姿勢も当然のことなのだろう。

ニュージーランドが歴史上に登場するのは 9 世紀頃ポリネシア諸島からやってきたマオリ人によるが、この土地を「アオテアロア」（長い白い雲の土地）と呼んでいた。

ヨーロッパ人がこれ等の島を発見したのは 1642 年 12 月オランダ人アベル・タズマンだったが、マオリとの争いで上陸することなく「新しい海の土地：ノヴォ・ゼーランディア」と呼んだ。

それから 100 年以上後の 1769 年 10 月 9 日、イギリスの海軍士官探検家ジェームス・クックがこの地を訪れ、その時初めて英語で“New Zealand”と呼んだ。



クライストチャーチ大聖堂



チャーターバス

クライストチャーチ Christchurch はその昔、オクスフォードのクライストチャーチカレッジの人達が開拓した街で、英国以外で最も英国的と云われる南島最大の都市だ。この街に南島人口の3分の1以上が集中と云っても32万だが、ちなみにニュージーランド全体では日本の7割の国土に総人口360万、内110万は北島のオークランドで完全に都市集中型、バスで走っていて羊は見ても人を見かけることはない。途中恐らく1日何本もないはずのSLと運よく並走、乗客とお互い手を振り合い機関車からは汽笛のご挨拶まであった。



珍しく出会ったSL



手を振りあって挨拶



きりがいい羊



薔薇色に染まる空

バスはファームステイの街アッシュバートンを過ぎてカンタベリー平野を横切りサザンアルプスへと向かう。はじめ歓声を上げていた羊の群れはあまりの多さにすぐうんざり、一体どれくらいと調べたらなんと人口の15倍、およそ5000万頭以上とは正しく羊の王国である。たまたま我々はニュージーランド到着が遅れたためにテカポ湖（テカポはマオリ語で寝る場所の意）で落日（日没は遅く21時）を迎えることになった。薔薇色に染まる空、雪を頂いて連なるサザンアルプスの峰々、ミルキーブルーに静まるテカポ湖、陸にはルピナスの花に囲まれた「善き羊飼いの教会」

がひっそりと佇んでいる、この教会を訪れると幸せになるという言い伝えがあり此処で結婚式を挙げるカップルも多いと聞くが、我等もこの旅の幸せを願いつつ此のメルヘンの世界に浸りきって時を忘れた。



テカポ湖の向こうにサザンアルプス



佇む「善き羊飼いの教会」

ホテルの夕食の時間に間に合わなかったので日本食レストラン「湖畔」で夕食を済ませ、マウントクックビレッジのホテル、ハーミテイジに入ったのは11:00pmを過ぎていたが部屋に入って窓の外を見ると風の吹き騒ぐ空に星が瞬き南十字星を探し見ることが出来た。このホテルはマウントクックビレッジの中心にあり100年以上の伝統を誇る素晴らしいホテルで此処に泊まれるのは余程の幸運とされるのだが、シャワーを使おうとしたらお湯が出ず水しか出ないので慌てて飛び出す、此のまま寝るしかしょうがない。



ハーミテイジホテル



とにかく寒い



広い食堂

明けて12月11日(水)今朝は暖かいお湯が出たが外は雨、然し明日からのミルフォードトランプに備えてトレーニング、完全雨装をしてハイキングに出掛ける。本来の目的はニュージーランド最高峰マウントクック 3754m (マオリ名アオラキ：雲を突き抜ける山)を眺めに行くことにあったのだがそれは無理、山の名前はクック自身ではなく1851年英国人測量士J.L.ストークによって付けられ、1770年クック来航時には高い山の連なり(3000m峰18座)を見て「サザンアルプス」と名付けたのみだった。



ハーミテイジ玄関ロビー



モレーン地帯を歩く



キープポイント標識



ホッカー川の濁流



スイングブリッジ



マウンテンデージー

ハーミテイジ前から北西にほぼ平坦な草原を 1 時間一寸歩き最後に急坂を登ったところにキープポイント Kea Point がある。好天ならばミューラー氷河末端のモレーン越しに正面にマウントクック、左手にマウントセフトンの懸垂氷河が見られる筈だが一面に立ち込めたガスに遮られて何も見えない。此のままではいかにもつまらないので、右手のホッカー川へ向かい、第一スイングブリッジを渡ってみたが、ホッカー氷河からの濁流が渦巻く上を渡る不安定な吊り橋はスリル満点、早々に引き上げる。 帰りの道すがら白いマウンテンデージーを見かけた、期待のマウントクックリリーがないのは残念だが、これから先はまだ長い、2 時間半の歩きはそれなりに楽しかった。此の辺りは標高 500m 以上、しかも比較的高緯度、南緯 44 度のため 1 2 月（夏）でも寒くホテルロビーの暖炉が有難かった。 ホテルの食堂で昼食をとったが、来年の 2 月まで此処で働くという若い日本人女性セガワタカコさんが頑張っているのはいじらしくも頼もしく思った。



セガワタカコさん



天気が良ければ、中央黒いモレーンの右上にマウントクックが

ハーミテイジを 1:20pm に出発、テカポ湖から 45km 離れた所にあるミルキーブルーの氷河湖プカキ湖（マオリ語で小川の源流）を過ぎ、トラウト（鱒）の養魚場を一寸見て一路クイーンズタウンへ向かう。 途中休憩の際、殆ど皆が舐めたニュージーランド定番のハニーコム入りチョコレートアイスクリーム、ホッキーボッキーHokeyPokey には満足、満足だったようだ。



矢張り晴れば素晴らしいのに



鱒の養魚場



ホッキーポッキーにご満悦

17 時 30 分、4 時間のバスドライブでワカティプ湖畔のクイーンズタウン、コプソーンホテル CopthorneHotel に到着したが、直ぐに明日からのガイドドウォークのガイダンスを聴きに基地ステーションへ向かわねばならなかった。(続く)

【2020 年 4 月 28 日 山本 浩 リメイク版】